
特務部隊はシャーマン！？

秋月秋代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特務部隊はシャーマン！？

【Zコード】

N4471Z

【作者名】

秋月秋代

【あらすじ】

転生者はシャーマンの続きモノ。

光ルートです。

更新は不定期です。
かなり遅くなる予定。

～第零廻～ プロローグ

三人称

時空管理局地上本部、レジアス・ゲイズ少将は嘆いていた。

ミッドチルダで起きる犯罪の数々。

優秀な局員は本局勤め、本局の連中は次元世界の取締ばかりで、地上のこと蔑ろにする……。

予算も本局とは天と地の差。

そして何より戦友達ともたちを六年前に失い、己の正義を見失い広域次元犯罪者に指定されるジェイル・スカリエッティに、違法研究をさせている自分に……。

「ワシの正義……あいつと交わした正義。此処何年耐え続けて来た……自身の正義から目を逸らして來たが……もう無理だ。そうとも、ワシはこんな事の為に上を目指した訳ではない！！」

長年の良心の責め、机に立てられて自身と戦友の目に耐え切れず、レジアスは一人職務室で叫んだ。

そしてレジアスは、写真立てを見て一人呟く。

「ゼスト、メガーヌ、クイント……今更かもしけん……だが、今更だからこそワシは、あの頃の自分に戻ろうと思つ」

人は、必ずしも正しい道を歩むとは限らない。

甘い言葉に負け、挫折を味わい道を外れる事がある。
しかし、人は道を外れても戻る事が出来る。

レジアス・ゲイズは、六年という月日を経て以前歩いていた道へ

と引き返して行つた。

そして遠い未来、レジアスは言つ。

「あの時、引き返してて良かった」と……。

三人称

葉生視点

今、オレの目の前に頭を下げる小肥りの男が居る。
彼の名前はレジアス・ゲイズ。

なのは達が、働いてる時空管理局のお偉いさんらしい。
なんでもミッドチルダを救う為に、シャーマンの力が欲しいとか
なんとか……。

「頭を上げる」

「…………」

オレが頭を上げるよつ言い、レジアスは頭を上げる。

「ふむ、何故シャーマンを知っているとか、シャーマンの力をどう
利用するのかとか、どうでも良くなつた。良いぜ、あなたの力に
なつてやる。精一杯オレをこき使え」

「ありがとう……ありがとう……！」

何故オレが此処まで見知らぬ奴の為に言つたかというと、単純にレ

ジアスの目が気に入った。

墮ちた濁つた部分はあれど、それに負けない程の輝きを見たからだ。

以前聞いたリングディの声、闇の書の中で見せられた人の業、そして転生前にハオから聞いた「愚かな人間」という言葉。

ああ、ああ、確かに人間は愚かだ。

道を踏み外し、外道と墮ちる奴らばかりだ。

転生前のオレも、そんな奴らの一人だったからよくわかる。でもよ……人は引き返せる。

やり直せるんだ。

見てるか？ ハオ。 人はこんなにも愚かだが、こんなにも愛おしい。

「だが、どうする？ レジアス。 管理局が欲しいのは魔導師なんだろ？」

「つ！ それについては考えがある」

涙を拭き、オレの質問に答えるレジアス。

そしてレジアスの考えとは、以下の通りらしい。

シャーマンと言つても、オレにリンクカーコアがあるとの事、ソレを利用してリンクカーコアを持つシャーマンの部隊を創るらしい。

「つまりは覆面魔導師の部隊と？」

「ああ」

「となると数が居るな、わかった。 オレ以外のシャーマンに会わせよう。 だが……」

「わかつてゐる。 ワシが全員口説く！」

「よひしい。 スピリット・オブ・ファイアーー！」

「ズガアアアアンツー！」

「ぬうおー！」

オレの後ろにスピリット・オブ・ファイアが現れると、レジアスは驚いたように声を上げる。

「つて、待て」

「ど、どりした？」

何故、魔導師じゃないレジアスが見える？ 魔導師としての資質がないだけで、リンクター・コアはあるのか？

「レジアス……確認の為に聞くが、オレの横に何が居る？」

「ん？ 赤い鎧を着た赤髪の女騎士だが」

『ツー！ 葉生』

どうやらレジアスには、シャーマンとしての資質が高いようだ。スピリット・オブ・ファイアの靈力に触れて、才能が開花したかな？ さつきの驚きはベビーから究極形態になつた驚きだろう。

「OK、わかった。それじゃあ、行くとしよう。

「ああ……」

葉生視点

～第一廻～ スカウト

葉生視点

レジアスを連れて向かつた先は、ニューヨークのある看護学校。此處には、三人のシャーマンが居る。

『彼女達に会つのも久しぶりですね』

そうオレに言つたのは、赤く染まつたアルトリアだつた。何故赤く染まつたのか、これには深くも浅い事情があつたわけで、とりあえず何処が赤いのかと言つと……金髪から赤髪へ、青いドレスは朱に染まり、手、足、胸にあつた銀の鎧は深紅へと変わつた。変わらなのは、性格と翡翠の瞳だけだ。

アルトリアが戻つて來たのは、もつ皆と別れたあと……唯一会つたのがマリオンだけ？

『ええ……』

「葉生……」

「ん、なんだい？ レジアス」

「どうしても入らねばいがんのか？ 出来るなら連れ出して喫茶店か何処かで……」

レジアスが周りを気にしながら、小さく主張する。

まあ女子寮の前で、オレは完全に女子寮に入つてる……そんな状態だからわからんでもない。

女子しか居ない施設。

むせ苦しいおっさんに、ネイティブ・アメリカンの民族衣装を決め込んだ男が一人。

周りの女子からは不審に思われ、レジアスからしたら恥ずかしい、気まずいといった感じだろう。だが――

「考へてもみる? こいつちは頼みに來てるんだ。あつちから来てもらひのは筋違いだ。それにこいつ所では、堂々としてれば良いのさ」

「そ、そなのか?」

『いや、私に聞かれても……』

オレの言葉を聞いても信じきれないのが、レジアスはアルトリアに確認するように問い合わせるが、アルトリアは困った表情をしながら答えた。

「ぐぬぬぬ……」

「レジアス……キミの正義は女子寮に堂々と入れない程、ちつせえものなのか? だとしたら見込み違いだつたかな」

「ツ! そんな事はない!! ワシは自分の正義の為なら……あいつと夢見た正義の為なら、女子寮に入る事くらい訳無い! ……」

事情を知らない者から聞いたら、どんな正義だ! とツツコミが来る発言をしながら、ズンツズンツと女子寮へ入つて行った。

「...」

『意地が悪いですよ。葉生』

良いじやないか、これくらい。

それにこの程度で戻込みするんだったら、本気で協力するのを止めるつもりだつたし……。

「おい！早く来んか！！」

お二ど、
いけない、いけない。

レジアスに懲がされる事はない。ホレはレジアスの後を追つた。

- - ピンピン

「はい、どちら様でしょ?」

ドアをノックすると、聞こえてきたのは優しくも懐かしい声。

一 麻倉葉生だ。
ちよひと

「ええつーーは、葉生ーー?」

「ちょ、ジャンヌ！ 葉生くんつてホントー!?」

「私が出て来るわー！」

「「抜け駆け禁止よー。ミイネーー。」」

ジャンヌが驚いたあとに、部屋の中から潤とミイネの声が聞こえ、段々と慌ただしくなつていった。

「あ～……元気な事で」

『此處数年で、さりに争奪戦が激化したのでは?』

「とつあえず、後ろから刺されるなよ?」

アルトリアとレジアスの言葉が耳に痛い。
好いてもらつてるのは嬉しい、嬉しいけどオレとしては良い人を見つけて欲しいよ。

シャーマンとして優秀な種を残す使命とか捨てて、さりに言えば落ち着きがないオレを見限つて……。

「プーアル茶です」

「お構いなく……」

あのドタバタが収まつたあと、オレ達は部屋に上がりせてもう一、レジアスをジャンヌ達に紹介した。

まあ、その時にアルトリアの事も一騒動はあつたけど、それは今は関係ないので横に置いておく……。

さて此処からが本題、レジアスが掲げる正義。

それを受け止めて、ジャンヌ達が力を貸しても良いと言つてくれるなら良し、もしダメなら諦めるしかない。

「それで何用でしよう」

「急で、貴女方の未来を曲げてしまつ話で申し訳ないが、ワシの正義について来て欲しい!! 時空管理局地上本部へ、ミッドチルダに住む人々が安心して暮らせるよう……」

「…………」「…………」「…………」

沈黙、まあそう簡単に事が運ぶとは思つてなかつたし、この展開は当然だね。

「葉生は……葉生はなんと?」

「ミイネ、ジャンヌと潤もだけど……これはキミ達の意思で決めてくれ。オレが居るから、皆が居るからじゃなくね。レジアスの意志に、自分の意思で応えてやつてくれ」

「ワシからも、お願いする」

「…………」「…………」「…………」

オレの言葉に、賛同するよつて言ひレジアスにジャンヌ達は驚く。
当然だろう。

力を貸してくれと言つておきながら、オレがついて行くと言えば
ついて来るのに、それに頼らないからだ。
レジアスが望むのは、レジアスの正義に共感する者だけ……。

「わかりました。 それでは一週間……時間をください」

「「私にも……」」

「わかりました。 では、一週間後……玄関の方に居ます」

こうして、最初の勧誘が終わった。

オレとレジアスは、すぐに退室して次の場所へと向かった。

「ユーモークからインド。

スピリット・オブ・ファイアのお陰で、素早く移動する事が出来た。

そして、インドに居るシャーマンは一人。
悟りを開き、人々を救い導くシャーマンを目指す……サティ・サイガン。

闇の書事件の時に、オレを救った西岸サチである。

「サティ」

「葉生！ ……とそひらば？」

「時空管理局地上本部所属のレジアス・ゲイズだ。 本日は貴女を

勧誘しに来ました」

「勧誘……」

サティが呟きながら、レジアスの言葉を返す。
そしてジャンヌ達に言った事を丸々偽り無しに言い、サティもまた考える時間が欲しいと言つてきた。
期限は三日で十分らしい……。

次に来たのは中国だ。

此処に居るのは、オレの友達にしてライバル。
ハオより、五大精靈が一つ……スピリット・オブ・サンダーとスピリット・オブ・レインを授かつたシャーマンだ。
ちなみにオレは三つ。

一つはスピリット・オブ・ファイア。

一つはスピリット・オブ・ウインド。

一つはスピリット・オブ・アース。

といつても、ウインドとアースは預かつてただけだがな。
まあそれは置いといて、そんなハオに認められたシャーマンの名前は、道蓮。潤の弟だ。

そして、蓮の他にも二人居る。

蓮の許婚である、カンナ・ビスマルクとマルダ・マティスだ。

彼女達は一族の修行に耐え、さらには独自の修行法を編み出して
ジャンヌ達と同レベルまで行つたのだ。

そこから超・占事略決を教えたりと、さらに強くなつた。

もつともそれは数ヶ月の天下で、すぐにサティとマリオンに抜かれたけどね。

「よく来たな。姉さんから聞いてるから説明は不要だ。結論から言つと、時間をくれ……明日には決めておく」

「さうやう、サティから行つたのは正解だつたかな。」「——マークから中国へ行つたら、潤の連絡は無駄になつてただらう。」

「もつとゆうくつ決めても構わないんだが……」

「いや、蓮が明日までつづつんだ。明日までこ答へは出ぬよな？」

「当然だ」

「それを聞いて安心した。まあ次で最後だ」

「あ、ああ……」

さて、問題はマコオンか……。

後に後にと考へてたら、結局は最後になつたな。

「レジアス……最初に言つておく」

「なんだ？」

「最後の人物だが、どんなに言葉を並べようとも、本人の意思というのを諦めた方がいい」

「どんな人物なんだ？」

「オレ至上主義。 オレが居れば自分の考えを無視して、オレについて来る」

なんせ離れる時もギリギリまで迷つてたし、今でも声を掛けられればついて来るからなあ。

「……………どうすればいい」

「こねばっかりは、しじつがないわ」

如何にレジアスの言葉を聞き、自分で考へると云つても、理由はオレについて行くになるからな。

『良く言えば純真、悪く言えば陶酔……小さなスピリット・オブ・ファイアですからね。 彼女は……』

「言つたな、アルトリア。

イタリア。

とある場所にある、ぬごぐるみ店。

「カラソカラソ

「いらっしゃいませ、葉生様」

扉を開けると田の前に、長い金髪をツインテールにして、黒いワニペースを着たマリオンが出迎えてくれた。

「久しぶりだな。 オレの言いたい事は……」

「わかつてます。 でも私は……」

「マコオノの事は、わかつてゐつもりだ。 レジアス……」

「どうしてもダメか?」

「無理だ」

「わかつた……」

「すまないな……」

レジアスに詫びて、オレはマコオノと向き合へ。

「…………オレと共に來い。 マリー」

「はいー。」

「チ「ココと、明るい笑顔を見せるマコオノ。

まったく、変わらないな……。

葉生視点

～第一回～ スカウト（後書き）

キャラクターのプロフィールって要りますか？

～第一廻～ 答え

葉生視点

マリオンが暮らしてゐる部屋で、一晩泊まつた次の日。
目を開けて隣を確認すると、せつぱつといふか案の定といふが、
マリオンが裸で寝ていた。

「…………」

「ん~…………はおおまあ」

起き上がるうとして体を起こすと、マリオンが腕に絡みついて動
けない。

仕方なしに、横に置いていた菓子の蓋（当然、缶の）を手に取り

……

- - ガンガンガンガンッ！！

マリオンの頭に、容赦無く叩き付けた。

「~~~~~ッ！？ 痛い…………」

「田の毒だ、パジャマくらい着ろ

「はい」

いつもやつて毎度毎度注意して、ちゃんと返事するがマリオンは一

向に、パジャマを着てくれない。

ちなみに「レは旅に出て、一ヶ月頃から始まつた事だ。

久しぶりに再会して直つてゐると思ったが、どうやらオレの考えが甘かつたらしい。

『元々、彼女を小さいスピリット・オブ・ファイアと評したのは、葉生ですよ?』

ああ、オレが甘かつたよ! 甘いよ! オレは!! だからそんな目で見るな、アルトリア!!

さて読者諸君、此処でスピリット・オブ・ファイアが嫉妬しないの~とか思うかもしけんが、スピリット・オブ・ファイアが嫉妬するのは、他の靈とオレが親密になつた時だけで、生きた人間同士が親密になろうが嫉妬はしない。 たまにするが……。

と朝はバタついたが、あれ以降何事も無く、中国へと旅立つた。

「よう、もう決ましたのか?」

「ああ……」

「久しぶりね。 葉生

「マリーちゃんも久しぶり~

「久しぶり、カンナ、マチルダ」

「久しぶり……」

蓮を挟むように居るカンナとマチルダに挨拶をして、三人の答えを待つ。

「俺達は入る事にした。俺達は互いが抑止力だからな、どちらかが傍に居ないとダメだろ」

「ああ、すまないな」

「ありがとう!」

「それで次は何処へ?」

「インドだけ……まだ時間があるから、蓮の所で一泊する予定だけ?」

「構わんぞ」

いやあ、重ね重ね……ありがたい。
にしても、昔と比べて落ち着いたなあ……蓮の奴。
これもハオのお陰か?

《呼んだ?》

呼んでないけど、聞きたい事がある。

《なんだい?》

オレと蓮つて、どっちが強いんだ？

『難しい質問だね。 巫力では蓮、靈力ではキミと言つた所かな』

フムフム、なるほど……オレの方が若干弱いって事か。

『大正解』

わかった、ありがとう。

やつぱり五大神二体は、スピリット・オブ・ファイアを以つても、厳しいらしい。

でも、大陰陽師の称号は伊達じやない。
いつかは決着を着けないとね。

「親父、今日は葉生と他二名が泊まる事に……」

- - ガヤガヤ

ん？ なんか騒がしくなった？

蓮が開けた扉を見てみると、そこには数百体のキヨンシーと巨人が居た。

そして壁には「義息子、歓迎」の文字があった。

- - キイイ……パタンッ

あ、扉が閉まった。

「すぐにイングリッシュへ向かうわ」

「え？ いや、でも……」

「行・く・ぞ――。」

「は――。」

といつわけで、急遽イングリッシュへ向かうことになった。

「あれ？ 葉生に蓮、カンナ、マチルダ、マリー、レジアスさん」
イングリッシュに着いて、まず向かったのがサティイが住んでる家。
本当は、明日の方が良いんだけどね。

「親父がウザかつたから、すぐこに来た」

「すまんな、サティイ」

「いえ、大丈夫ですよ」

サティイの許可が出て、オレ達は家中へ入った。
そのあとレジアスに声を掛け、シャーマンの修行を課してみた。
しばらく見ていてわかつたが、やはりレジアスにはシャーマンの
才能があるひしひ、どんどんその才を開花させて行った。

「…………レジアス」

「ぬ、なんだ？ 蓮」

「お前、シャーマンキングの修行をしないか？」

「蓮？」

今まで黙つて見ていた蓮が、レジアスにとんでもない事を言つ出した。

シャーマンキングの修行。それは、オレと蓮が受けたモノだ。確かにソレを受ければ、レジアスの力は絶対的なモノとなるが、リスクが高すぎる。

「どうする？」

「それを受けれる程の力が、ワシにあるのか？」

「シャーマンの強さは、強靭な精神力だ。貴様の正義が本物なら、可能だらう（俺は葉生のような靈視は出来んからな。だから俺は俺のやり方で、貴様の正義を見極める）」

蓮の心の声が聞こえて来る。

そういう意図があるなら、オレからは何も言えない。

「そう言われては引けんな。受けよう！」

「良いのか？ ああ言つてはなんだが、アレは軽く死ねるぞ

「構わん！」

「そりか……ならば、逝けい！！」

「ドオオオオオソッ！」

蓮はレジアスの魂を剥ぎ取り、すぐさまグレート・スピリットへと送った。

あとはレジアス次第。

「さて、どうなるか楽しみだ」

「レンはどうくらいの期間、ハオの所に居たんだ？」

「三ヶ月だ。消滅しかかったのは、一回だったかな」

「マゾヒスト」

「黙れ、リア充」

「ブチツ

「許婚が居るツンデレに、言われたくないな

「貴様は五人だがな！」

「…………」

沈黙が部屋を支配する。

そして……

「 ガキイイイイインンッ！！

「 やるかあああああー！？」

オレはスピリット・オブ・ファイアの腕だけオーバーソウル化し、蓮はスピリット・オブ・サンダーの腕だけオーバーソウル化してぶつかり合い。 オレ達も組み合った。

「 ガスッゴスッ！」

「 グハツ！？」

「 地球で、喧嘩しないよう！」

頭に強烈な痛みが走った。

翌日

朝食を取つたあと、サティに呼ばれた。

「 私もついて行く事を決めました」

「 ありがとう。」これからよろしく

「 はい」

これであとはジャンヌ達だけど、全くといつていよいほど不安はない

い。

レジアスは不安で、一杯だつたらしいけど……。

「ところで、スピリット・オブ・アースはどうだ?」

『さつき天に昇つて行つたのを見たよ』

『私もです』

『担い手の所へ行つたよ』

『では……あの人気が?』

『まだわからないけどね。あ、そうだ……あと三日くらい居座る
けど良い?』

『ええ、どうぞ』

『ありがとう』

さて、残り三日。

ハオからの報告で、レジアスは頑張つてるらしいけど、大丈夫か
ねえ。

サティの所に泊まつて、三日が経つた。
レジアスは、まだ戻らない。

「どうしようか？」

「普通に連れてていけば良いだろ？」

「いや、レジアスが起きてないと意味がないからなあ」

「…………やはり見極めるのは、見送つてた方がよかつたか」

確かに、空氣読めなさすぎの発言だったのは認めるよ。

アレは最低でも、一ヶ月は掛かるし……。

でも、止めなかつたオレも悪いっしゃあ悪いんだけどね。

『やあ、待たせたね』

「「ツ！？」ハオ（シャーマンキング）——」「

『今からレジアスを帰すよ』

ハオから叫びられた言葉の意味がわからずで、オレ達の思考が停止する。

三日だぞ？ 三日……いくらなんでも早過ぎるだろ……。

『急ピッチでやつた！ 途中から泣いてたけど……』

「「ああ、わかる。オレ（俺）も覚えがある」」

レジアス……強く生きれ……。

「それじゃあ、レジアスも戻ってきた所で行くとしようが」

「「..「おー」..」

「生きてる。こんなにも生きる事が、嬉しく感じるのは初めてだ。
母さん、産んでくれてありがとうーー！」

うん、一人だけなんか違うけど、今はソッとしておいで。
誰だって母親に感謝する時がある。
レジアスにとって、それが今日だったんだ。

というわけで、ニユーヨーク。
ところで、みんなは知ってるかな？ ニューヨークって、漢字で
書くと「紐育」こう書くんだ。

覚えておくと、なんか良いことでもあるんじゃない？

「時にレジアスの持靈つて何？」

「つむ、大地だ」

「大地？」

スピリット・オブ・アースじゃないのか？

「本来の名前は、スピリット・オブ・アースだが……長いから大地と名付けた」

「安直過ぎじやないか？」

גָּדְעָן

だいたいミシギって、歐風の名前だろ？ それだったらアースだけでも……

卷之三

「ん、なんだ？」
スピリット・オブ・ファイア、スピリット・オブ・
ウイング

「どうした？」スピリット・オブ・サンダー、スピリット・オブ・レイン」

卷之三

「「名前が欲しい？」

なんと言ひへりとか。

まさか、スピリット・オブ・ファイア達が名前を欲しがるなんて

いや、この場合は愛称か……。

しかし、どうする？ 完全に予想外だ。
パツとなんて思いつかないぞ。

「スピリット・オブ・サンダーは雷公、スピリット・オブ・レイン
は靈龜だ」

なんか蓮は、すんなりと言つてゐる。

ヤバい、オレも考えないと！！ それにしても雷公は良いとして、何故靈龜？ 玄武が水を司るからか？ 龜繫がり？ でも四神の司る力つて、ほとんどバラバラだよなあ。

青龍が司つてる時もあるし、う～む…謎だ。

「さつさと決めた方がいいぞ。スピリット・オブ・ファイアが嫉妬する」

『.....』

そうだつた.....。

ヤバい、考える！ オレ！！ 火、炎、太陽.....」の三つを司る靈的名前。

カグツチは、没だな。

カグツチは、スピリット・オブ・ファイア自身を指す。

というか、五大神として名を連ねた今では、カグツチなんて下つ端辺りじゃないか？

「.....アマ」

- - ボウツ！

アマテラスですら納得いかない様子.....。
マジで考えねば、死ぬ！！

「はあ…（スピリット・オブ・ファイアだけの名前を決めれば良い

んだ。既存の火靈、火の神の名前を決めた瞬間、終わるや（」

「…………その考えはなかつた」

ならば、真剣に考えてやらないと失礼だな。

スピリット・オブ・ファイアを見て、連想する名前。

火琳、火煉、炎羅、炎浬。

これでは、火に囚われすぎか。

オレの名前を一文字加えるとどうなる？

「炎生……スピリット・オブ・ファイアの炎に、オレの葉生という名前の生をくつづけて炎生と言つのはどうだろ？？」

『…………』

スピリット・オブ・ファイアから、嬉しいという感情が流れ込んで来る。

うん、気に入ってくれたみたいで何よりだ。

ただし、心の中くらいではスピリット・オブ・ファイアで良いよな？ 真名は大事なんだし……。

「あとはスピリット・オブ・ウインドか……」

どうせならスピリット・オブ・ウインドにも、オレの名前を加えたい。

葉……は、ば、ぱ、よつ。

風……かぜ、かざ、ふ、ふう。

そしてスピリット・オブ・ウインドの性別は女。

風ふ + 葉よう = 風葉ふよう

「風葉でどうだ！」

『…………』

うむうむ、御満悦の様子。

というか、読む人から見て五大神の感情つてわかるのか？ 三点
リーダーだろ？

《その為に、キミが言つてるんだから良いだろ？》

まあな……。

さて考え方をしていたら、ジャンヌ達が居るではないか。
という事は……

「ああ覆面魔導師部隊が完成したんだ！－！」

レジアスの喜びに満ちた声が、周囲に響く。
周りの視線が痛いが、今は祝福しておこう。

「さて、此処から本腰を入れるぞ！ 会議だ、レジアス！－！」

「わかつてゐ－！－」

葉生視点

（プロフィール）

葉生と葉生の持靈

名前：麻倉 葉生

性別／年齢：男／17歳

学歴：小学校 卒業

出身地：日本・海鳴市

巫力数（前回値）：125億402万（125億）

備考：各世界の靈山に登り、シャーマンキングであるハオの修行で17歳という若さで、大陰陽師へと成長を遂げた。

持靈
1

名前：アルトリア・ペンドラゴン

性別／ランク：女／神

靈力数（前回値）：30億（20万）

媒介：酸素・エクスカリバー

戦闘スタイル：剣術・燃焼

備考：葉生の最初の持靈。
以前と違つて姿が一変しており、新たな能力も手にしている。

持靈2

名前：炎生えんり

真名：スピリット・オブ・ファイア【究極形態】

性別／ランク：女／五大神

靈力数（前回値）：60億（-）

媒介：酸素・燃焼物・熱源

戦闘スタイル：燃焼

備考：葉生の為に誕生した二体目の五大精靈。

しかし凄まじい成長を見せて、五大精靈の枠に收まりきれずにシャーマンキングが、新たに五大神という枠を作る程。ちなみに五大神は、その強力故か互いが抑止の存在となっている。

持靈3

名前・風葉

ふよう

真名・スピリット・オブ・ウインド

性別／ランク・女／五大神

靈力数・60億

媒介・空氣・風

戦闘スタイル・氣流、氣体、氣圧の制御

備考・五大神同士の抑止的存在。

葉生と蓮の持靈

蓮と蓮の持靈

名前・道 蓮

性別／年齢・男／17歳

学歴・中学校 中退（表向きは、転校）

出身地・中国・貴州

巫力数（前回値）：200億（102万4千）

備考：葉生のライバル的存在。

A S 時、葉生との実力差が大幅に広がって以来、修行に明け暮れる毎日を送っていた所、シャーマンキング直々に修行をつけてもらう事にこぎつけた。

持靈 1

名前・馬孫

性別／ランク：男／精靈

靈力数：10万6千

媒介・馬孫刀・宝雷劍

戦闘スタイル：刀剣術・雷を操る

備考：蓮の持靈。

道家に仕えてる武将の靈。

持靈 2

名前・雷公らいこう

真名・スピリット・オブ・サンダー

性別／ランク：男／五大神

靈力数：60億

媒介：雲・宝雷剣

戦闘スタイル：放電・磁力

備考：五大神同士の抑止的存在で、シャーマンキングとの修行を受けてた蓮の魂に惹かれて、自ら蓮の持靈となつた。

シャーマンキングもそれを許可している。

持靈3

名前：れいき靈龜

真名：スピリット・オブ・レイン

性別／ランク：女／五大神

靈力数：60億

媒介：水

戦闘スタイル：浸透・溶解

備考：五大神同士の抑止的存在。

スピリット・オブ・サンダーと同じく、蓮の魂に惹かれて持靈につた。

これもシャーマンキングの許可が下りている。

他にも、李書文や呂布などが居たが、蓮の修行に耐え切れずに、現在はグレート・スピリットにて療養中。

蓮と蓮の持靈

ジャンヌとジャンヌの持靈

名前：アイアンメイデン・ジャンヌ

性別／年齢：女／17歳

学歴：医療専門学校 自主退学（表向きは、転校）

出身地：フランス・ロレーヌ地方

巫力数：1億760万

備考：葉生の許婚にして、神クラスのシャーマン。
葉生との関係は良好。

持靈

名前・シャマシユ

性別／ランク・男／神

靈力数・52万

媒介・拷問器具、アイアンメイデンの面

戦闘スタイル・審判（ほぼ死刑というか私刑が多い）

備考：神クラスの靈にして、絶対正義の権化とも言つべき存在。その正義には一切の妥協を許さず、行ってきた審判の殆どが死刑（というか私刑）。

ジャンヌとジャンヌの持靈

潤と潤の持靈

名前・道 潤

性別／年齢・女／21歳

学歴・医療専門学校 自主退学

出身地・中国・貴州

巫力数：1億

備考：葉生の許婚で、キヨンシーを操るシャーマン。
その実力は並のシャーマンでは、上位に食い込むといつか巫力、戦
闘技術から神クラスのシャーマンとなつてゐる。
葉生との関係は良好。

持靈

名前：孫 明

性別／ランク：女／人間靈

靈力数：1000

媒介：自身の肉体

戦闘スタイル：肉弾戦

備考：潤の持靈にして、キヨンシー。

彼女が使う戦闘技術は、中国の英靈達から得たモノで、よく好んで
使うのは馬孫から教わった中華斬舞の亜種（格闘術）、中華乱舞。

潤と潤の持靈

ミイネとミイネの持靈

名前：ミイネ・モンゴメリ

性別／年齢：女／21歳

学歴：医療専門学校 退学

出身地：カナダ・モントリオール

巫力数：1億

備考：葉生の許婚。

当初はそれなりの実力者だったが、麻倉家で修行し、許婚同士と競い合う事で神クラスのシャーマンとして覚醒した。葉生との関係は良好。

持靈

名前：ミカエル

性別／ランク：男／聖靈

靈力数：48万

媒介：光

戦闘スタイル：剣術・レーザー

備考：機械天使ではなく、本物の天使。

天国のコミコーンで、他のコミコーンを管理してゐる時にミィイネと出会い持靈になつた。

ミィイネとミィイネの持靈

サティとサティの持靈

名前・サティ・サイガン

性別／年齢：女／20歳

学歴：小学校卒業

出身地：日本・東京

巫力数：50億

備考：葉生の許婚。
許婚の中でも一位、二位を争う程の実力者だが、温厚な性格から戦う事を嫌う。
葉生との関係は良好。

持靈

名前・ダイニチ

性別／ランク：男／神

靈力数：70万

媒介：腕鍼わんせん

戦闘スタイル：大仏パンチ

備考：サティとの修行で、宇宙からの力を受けてセンジューがダイ一チへと昇華した。

その強大な力故か真の姿では、世界が壊れるため、何百万分の一にまで抑えてオーバーソウルになる。

サティとサティの持靈

マリオンとマリオンの持靈

名前：マリオン・ファウナ

性別／年齢：女／16歳

学歴：小学校 卒業

出身地：イタリア・ナポリ

巫力数：100億

備考：葉生の許婚。

サティとタメを張る程の実力を持つシャーマン。

葉生の為ならなんでもし、何に置いても葉生、葉生、葉生。
これほどマリオンが葉生を執着する理由は、実の所マリオン自身よ
くわかつてない。

葉生との関係は良好だが、周りから見たマリオンは異常の一言。

持靈1

名前：キッド

性別／ランク：男／人間靈

靈力数：750

媒介：西部のガンマン人形

戦闘スタイル：銃撃

備考：マリオンの持靈。

持靈2

名前：
・

性別／ランク： /

靈力数：0

媒介：無し

戦闘スタイル：無し

備考：靈力0という異常な靈（靈とすら呼べるかわからない）。
マリオンすら知らない何か。

葉生もシャーマンキングすら氣付かない何か。 詳細は不明で、おそらく表には一生出てこない。

しかし、マリオンの葉生の執着の原因はコレ。

マリオンとマリオンの持靈

カンナとカンナの持靈

名前：カンナ・ビスマルク

性別／年齢：女／20歳

学歴：高校 卒業

出身地：ドイツ・ザクセン

巫力数：1億3千

備考：蓮の許婚。

当初、葉生の許婚達とは仲が悪かつたが、今では仲が良い。
蓮との関係は良好。

持靈

名前：アシュクロフト

性別／ランク：男／人間靈

靈力数：1700

媒介：煙

戦闘スタイル：槍術

備考：カンナを守護する老騎士。

その実力は鎧を纏つた状態でも、孫明を凌駕する。

カンナとカンナの持靈

マチルダとマチルダの持靈

名前：マチルダ・マティス

性別／年齢：女／17歳

学歴：中学校 中退（表向きは、転校）

出身地：イギリス・スコットランド

巫力数：1億

備考：蓮の許婚。

彼女もカンナ同様、葉生の許婚達と仲が悪かったが、今では仲が良い。

蓮との関係は良好。

持靈

名前：ジャック

性別／ランク：男／人間霊

靈力数：1500

媒介：カボチャ人形

戦闘スタイル：ナイフ

備考：マチルダの持靈。

イギリスで恐れられてた連續殺人犯。

マチルダとマチルダの持靈

レジアスとレジアスの持靈

名前・レジアス・ゲイズ

性別／年齢・男／52歳

出身地・ミッドチルダ・-

巫力数・70億

備考・今更、正義を取り戻した男。

長年の良心の責めに耐え切れず、しかし自壊せずに引き返すという
強い精神を見せた。

その精神の強さ、正義は、葉生、蓮、ジャンヌ、サティと言った最
強のシャーマン達に認められ、さらには大地を司りし五大神、スピ
リット・オブ・アースにも認められる程。

持靈

名前・大地

真名・スピリット・オブ・アース

性別／ランク・男／五大神

靈力数・60億

媒介：土・石

戦闘スタイル：重力操作・地震、地割れ等の土と岩関連の災害

備考：五大神同士の抑止的存在。

レジアスの強さに惹かれ、自らレジアスの持靈になった。

レジアスとレジアスの持靈

～第二回～ 結成、特務部隊！（前書き）

後半、時間飛びます。

ぶつけやけ、やつけやつた感バリバリ？

～第二廻～ 結成、特務部隊！

葉生視点

さて仲間が集まつた事で、作戦会議とやらを開かねばなるまい。という事でやつて来ました、ミシドチルダのとある一軒家。門前にあるポストには『マクレディッツ』の名前があつた。

「誰の家だよ」

「会えればわかる。　といつか、驚く」

ニヤリといつた感じで、レジアスは笑う。
悪い代官がやりそうな表情とは、死んでも言えんな。
実際、悪の代官並だつたらしいし……。

「悪人面した笑いね」

「グサリッ！」

言つのを躊躇ためらつたオレに反して、マイネの言葉の劍がレジアスに刺さつた。

「…………ぐすつ」

オレ達（マイネを除いた）は、ミシドの空を見てレジアスに激励を贈つた。

「頑張れ」と……。

とりあえず人の家の前で、何時までも居るわけにもいかず、オレはインターホンを押した。

・・ピンポッ

「はーー」

「「…」「ツ…」「…」「」

チャイムの音が短いとか思つよつも、聞こえてきた声にオレ達は驚く。

子供っぽさを残した声。

今でも思い出せば甦る……ゲームを片手に「はおー」と、一呼吸に向かって走つてくる金髪の女の子。

一度は命を落とし、シャーマンの秘術を持つて、生き返った少女。

「じゅうじゅうま～って、はおー レンー！」

「アリシア・テスター・ロッサ……」

前と比べて、いろいろと大きくなつたアリシアが、ドアを開けて出て來た。

なんか……物凄い違和感がある。

「何故、此処に居る」

「それはじつちのセリフだよ」

アリシアの言葉に、此処へ案内したレジアスの方を見る。するとレジアスは「どうだ、驚いただりう~」と、言わんばかりのドヤ顔をかましてた。

「レジアス……まさかオレ達の存在を知ったのは……」

「そうだ……フレシア・テスタークサからだ。今ではフレティア・マクレディッシュと名乗ってるがな」

レジアスの言葉に納得する。

そして、無理矢理聞き出したわけじゃ無い事も……。

「あ、おじちゃん」

「元気にしてたか？ アレシアちゃん」

「うんー。」

アレシア……今のアリシアの名前なんだろう。
しかし……こうして見ると、アリシアとレジアスが援助交際して
る風にしか見えないんだが……。

「まるで援助交際してる人みたい……」

「ズキュウウウンッー！」

「ガハツ！」

オレが思つていた事を、今度はマリオンが言葉の銃弾でレジアスを貫いた。

頑張れ、レジアス！ 正義のために…！

「アレシア……でいいのか？」

「うん、いいよ。それで何か……あ、母さん？」

「うん、まあそれもあるが……中に入つても良いか？」

「良いよ~」

アレシアに感謝して、オレ達はマクレディツ家に入つて行つた。此処でプレシア……今ではプレティアか？ あの人気が前のまま若い状態を保つていたら、誰かが言つだらうな……不倫してゐたいと……。

「誰か来たの？」

「うん… むじゅやんとはお達…！」

「うー… もう… とりとつ来たのね」

扉の向こうで聞こえてきた会話を推測するにあたつて、どうやらオレ達が来る事は想定内だつたらしい。

ならばと、オレ達は扉を開けてプレティアの前に現れる。

「久しぶり、プレシア……いや、プレティアって言った方がいいか？」

「ええ、プレティアの方にして……そして、久しぶりね。葉生、男前になつたわね。蓮も……」

「老けてると思っていたが、ますます綺麗になつたんじゃないかな？」

「プレティア」

プレティアの言葉に機嫌を良くしたのか、蓮もプレティアを褒めたたえる。

許婚を前によく言えるモノだな。

「ありがとう、蓮。で、葉生は何も言ひてくれないのかしぃ？」

「オレは蓮と違つて、ジャンヌ達の前で女性を褒めない。無いとは思うが、後が恐い」

「そり……それは残念」

「それじゃ、蓮を借りてへよ」

「ガシッ！」

「ん？」

「話はマリーちゃんで聞いてからでも聞くからさ」

「ガシッ」

「ぬ？」

カンナとマチルダに両腕をガツチリホールドされて、マクレディ
ツツ家を出て行く三人。

笑いを堪えてるフレディアを見る限り、アレはオレの許婚達も焚
き付けようとしてたのだろう。
命拾いした。

「あ、私はレンの所へ行つてくるー」

「氣をつけるのよ」

「はーい」

そして今まで見ていたアレシアも、慌てて蓮達の後を追いかける。

「アレシアも変わらないな」

「当然よ。女の愛は、そつそつ冷めたりしないわ」

アレシアが蓮の事を好きになつたのは、闇の書事件の時だった。
オレが倒れ、フエイトも倒れて元気が無くなつたアリシアを蓮が
元気付けた事から、好きになつたらしい。

で、闇の書事件が解決したあと、告白しようと頑張りとするも、
中々告白出来ずにミッドチルダへ引っ越す事になった。

そのあとは、手紙のやり取りを繰り返してると、まだ好きだった
とは驚きだ。

「現代社会を生きる女性の愛は、そつそつに冷めるんだけどなあ

「それは本当に愛してないだけ……」「

「やうひか、まあ話はこれくらいにして、レジアス……会議を始めようか」

「あ、ああ……」「

プレデイアの話をそこそこ、残りのメンバーで会議を始める事にした。

まず始めにやる議題は……

「管理局は警察や軍みたいに訓練校があるんだり？　いきなり部隊を立ち上げるのは無理だと思つが……」

「やうひについては、ワシの推薦として訓練校に行かず、一般局員としてすぐに働かせる事は出来る」

オレの疑問に、レジアスは問題ないと主張する。しかし、問題はまだまだある。

「それでも部隊をすぐに立てる事は……」「

そう、部隊の建設。

推薦で入った人間同士が、固まって部隊を作るのは無理がある。

「それに貴方のバックに居る最高評議会……」

「最高評議会にとつて、レジアスさんは替えの利くの駒だしね」

潤さんの言葉に頷く全員。

一番の問題といったら、最高評議会なんだよなあ。
出世欲がある人間に、地上本部のトップの座をチラつかせ、靡い
たところでレジアスを切り捨てる。

「…………

それを十分に理解してゐるのか、レジアスが黙る。

「仕方ない気が滅入るが……レジアス」

「なんだ?」

「今まで通りとは言わんが、最高評議会の下で働く

「…………スペイか?」

「そうだ、お前の正義は地上の平和だ。あっちがお前を利用する
なら、お前もあちらを利用すればいい。目を付けられない程度に
な」

「…………それしかない、か」

「相手は時空管理局のトップだからな」

レジアスにとつては、取りたくない策だろうが、トップを相手に
啖呵たんかを切れば即退場。

レジアスは闇を知りすぎてるからな……。

「不本意だが仕方ないか……」

「となると急にレジアスさんが、私達を推薦入隊させるのはおかしいわね」

「それならワシの娘がある。娘はワシの副官だから、推薦は可能だ」

「他にも仲間が必要だな……」

「他にレジアスさんの味方はおられないので?」

ジャンヌがレジアスに聞くと、レジアスは汗を滲のよに流していて、オレ達は理解した。

居ないんだな、味方。

「！ そうだ、話せばわかってくれる奴が居る……！」

「ほう……誰だ？」

「陸士108部隊部隊長、ゲンヤ・ナカジマだ！」

「というわけで、陸士108部隊に行ってきました。」

「あんたらが、レジアス少将が言つてた奴らか？」

「はい」

「ふう～ん。まあ俺はレジアスがどう変わったかなんて、信じちゃあいなかつたが……あんたらのような目をした奴が、腐つたあいづに付くわけが無い。レジアス少将からは俺が言つておくよ」

「ありがとうございます」

ジャンヌが頭を下げるとき同時に、後ろに居るオレ達も頭を下げる。

これで入隊して、すぐには行かないが部隊を設立出来る。とりあえず、数ヶ月は此処で働く事になるかな……。

「あ、そろそろ……部隊を建てなくても、新たに部隊が設立するつて話なんだが……入つたらどうだ?」

と、此処でゲンヤが爆弾を落としてきた。

「確か部隊長の名前がハ神……」

「いえ、私達は地上の治安を守る部隊として建てるので……」

あの会議が終わつたあと、プレディアが話してきた。

遺失物管理部機動六課、被害者への謝罪が終わつて、管理局が行う裁判で贖罪じやくざいとして管理局に無償で働く事になつたハ神はやで。贖罪が終わつても管理局で働いていて、今では新しい部隊を立ち上げて人を集めてるとか……。

フェイトにも話が来てるらしいが、フェイトは管理局がやつてゐる違法行為の証拠を集めながら、執務官の仕事をしてゐるため……はやての誘いを蹴つたらしい。

いやはや、頑張ってるねえ。

「そういうかい、まあ一緒に仕事する時は頼む」

「ひがいひがい」

じつしてレジアス、オーリス、ゲンヤの地上本部で有名な三人の協力を得て、オレ達はなのはとはやてらの田をかい潜り、管理局へ入隊した。

オレ達の入隊を知ったのは、フェイトだけだつた。

さらに知つたのが、プレディアでもアレシアでもなく、レジアスが使つた連休が不自然だと感じて、調べたらつてオレ達の存在が出てらしい。

フェイトの調査能力に、戦慄したオレだつた。

そして時が流れ一年足らずで、オレ達の部隊が完成した。

後見人がオーリス・ゲイズ三佐しか居ないが、魔導師ランクの低い者が集まつた部隊と云つことで、一人だけでも許可がおりた。

そして前々から、部隊を立ち上げるために頑張つてたはやはては、一年足らずで設立されたオレ達の部隊を見に来て、久しぶりの再会をした。

（第二回） 結成、特務部隊！（後書き）

これから原作介入まで、地上の犯罪者を逮捕しまくります。

～第四廻～ 新米部隊長

葉生視点

部隊の堅苦しい挨拶、他の地上部隊への挨拶を一通り終えて、特務部隊に宛てがわれた部屋に行くと、そこには書類の山が部屋を埋め尽くしていた。

「なんだ、これ」

「我らが特務部隊の仕事」

書類の山から顔を出した蓮が、オレの疑問に答えた。
よく見ればジャンヌもサティも潤、孫明、ミイネ、カンナ、マチルダ、他のみんなも書類を捌いてる。
そしてマコオンは、ガンマンのぬいぐるみで遊んでいた。

「マコオンはしないのか？」

「難しい……」

難しこそ、オレが中学で習つ事は教えただろう…………。

一枚の書類を取つて、内容を確認すると中学生でも出来る物だつた。

「マコー…………」

「…………頑張る」

「それでよし」

さて、オレも始めるとしようか。

隣の部隊長に宛てがわれた内部屋の扉を開けると、真っ白な壁があつた。
よく見ると線らしき物があり、火を点せばよく燃えそうじゃないか……。

「…………蓮」

「それは部隊長の仕事だ」

「特務部隊のトップ」

「数秒前に失せたから、貴様のままでいい」

なるほどなるほど……。
フツしうががないな……

「憑依合体」

「「「…」「…」「…」「…」「」」

オレの弦きを聞いて、全員の視線がオレに突き刺さる。

何を驚いてるか知らんが、オレ達はシャーマンだ。
シャーマンならシャーマンらしく、靈に頼るべし……。

事務処理が得意な靈と憑依合体したオレの身体は、靈の書類処理能力を使って捌いていく。

そして一分後には、部屋に溜まつた書類は一割を終えた。

フツ 一歩だけ、部屋に入れたぜ。

「『なんて言つてゐる場合ぢやないな。 一步で感動してどうするよ。 とか設立して、なんでこんなにあるんだ?』」

「なんでも各部隊の書類処理が間に合わなくて、どうしようか知恵を絞つた結果……新設した部隊に各部隊の処理10%押し付け……手伝わせようつて話になつたらしくわよ」

一つ目のオレの疑問に答えたのは、潤さんだつた。

「どうか10%つて、多過ぎぢやないか?」

『事件発生、特務部隊は陸士108部隊と共に出動してください』

早速特務部隊にも出動要請が出たが、オレ達はぶつちやけそれどじいぢやない。

「『……マコオン、頼んで良いか』」

「はつー。」

「私も出すか?」

「『頼む』」

「了解」

故に現状抜けても大丈夫なマリオンと、保険にマチルダを一人しか出せないがこれで良いの……か？

しばらく書類処理をしてると携帯が鳴り、出てみると108部隊の指揮官からふざけてるのかとお叱りを受けた。

「うちの連中が何か？」

『何か？ ではない！！ なんで一人しか出してこんのだ！！』

「と言いましても、こっちも大量の書類仕事がありまして、出せる人材が二人くらいしか……」

『せめて一個小隊は出せ！！』

「おいおい、こっちは各部隊の援軍部隊のよつなモノだぞ？ 小隊丸々出したら、他の援軍に行けねえよ。」

「そういうば、事件つてなんですか？」

『アア？ 立て籠もりだよ！ 人質も居るつて話だが……』

「それくらいでしたら二人で、いや一人で十分ですよ」

『何を馬鹿なつて、おい金髪！ 何処へ……』

- - ガシャアアアアンッ！！

『何やつてんだああああああああああ！？』

電話の向こうで何かが割れる音がして、その後に108部隊の指揮官の怒声、さらに銃の発砲音が聞こえる。

状況を察するにマリオンが侵入の為、ガラスか何かを割つて、驚いた犯人もしくはマリオンがオーバーソウルを発動して、発砲したて所だろう。

『葉生部隊長）、今マリーちゃんが敵を捕まえて万事解決！人質に怪我はありません！ 以上、現場からでした』

『あ、こら勝手に……』

- ブツ、ツーツー

「現場の方はどうでした？」

ケンヤんがうまれるやうに

一
愁傷様です

ジャンヌの問いに答えたなら、マリオンが何をしたのか想像出来たのか、ジャンヌ達から哀れみの視線を受けた。

実はマリオンの暴走というか、独断行動はゲンヤさんがいくら注意しても直らず、最終的にオレが注意を受ける始末。

そして今回……今度はマリオンを行かせた上司の責任として、注意を受ける事間違いなし……。

「マリオンを行かせたのは、まずったかなー」

『事故が発生。 特務部隊は……』

「サティとジャンヌよひじへー」

「了解」

「わかりました」

一人に行くよう指示しながらも、書類を処理し続け、さらに部隊をどう分けるかを考える。

まずは蓮を隊長に、潤、孫明。

次にジャンヌを隊長に、ミイネ、カンナ。

最後、サティを隊長にマリオン、マチルダ。

このオーダーを基本に、他のバリエーションも考えてた方がいいかもな。

そんな事を考えながら、部隊長の部屋に集まつてた書類は片付いた。

「あとはこれを各部所に送るだけか……。 誰かオレの部屋にある書類を各部所に送つてくれ」

「わかりました」

「終わったなら、じつちを手伝ってくれ」

「はいはい……」

オレの部屋にある書類は、紫色の髪をした一般局員に任せて、オレは蓮達がやつてる書類に手を出した。

『海上で事故が発生 - - - □ - - -』

「海上なら蓮だけで十分か?」

「ああ、任せろ」

「じゃあ、よろしく」

と、こんな感じで最初の仕事は終わった。

ちなみにこの事をレジアスに言つたら、もつ少し部隊の動かし方を覚えると言われた。

そして案の定、ゲンヤさんからお叱りを受けた。

葉生視点

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4471z/>

特務部隊はシャーマン！？

2011年12月20日18時49分発行